

報告

実例による異文化コミュニケーションの問題分析 -青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に-

鄭 愛軍¹⁾ 大橋 眞²⁾

¹⁾ 青島理工大学外国語学部 ²⁾ 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

概要：近年の中日間の交流の増加は、中国における日本語教育の発展につながってきた。グローバル化社会に適応した人材育成は両国共通の課題であり、新しい教育プログラムの開発が必要になってきている。このような背景をもとに、中国・青島理工大学と徳島大学の間で、インターネットを用いた遠隔ビデオ会議システムにより、日本語での双方向性コミュニケーションを実施してきた。これまで、実現出来なかった遠隔地の学生とリアルタイムで会話をすることは、学生にとって良い刺激効果を与えており、この異文化コミュニケーションが大きな成果を収めている。しかしながら、その一方で様々な問題点も浮かび上がってきた。本稿では、実例を取り上げながら、様々なトピックスから異文化交流の課題について検証する。また、両国の学生についての課題についても考察する。

(キーワード：異文化コミュニケーション, インターネット, 日本語学習)

A multiple analysis of an issue of intercultural communication A case study of intercultural communication between Quindío Science University and the University of Tokushima over internet.

Tei AIGUN¹⁾ Makoto OHASHI²⁾

¹⁾ Foreign Language School, Qingdao University of Science and Technology

²⁾ Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

(Key words: cross-cultural conversation, Internet, Studying Japanese)

1. はじめに

近年来、中日間の経済、貿易、文化などの交流の増加に伴って、中国における日本語教育も大幅に発展してきた。2008年の日本国際交流基金による海外日本語教育の現状調査によると、中国は、日本語を学習している人口としては、韓国に次いで世界第二位の日本語学習者を持つ大国となった¹⁾。国際ボーダレス化という背景のもとに、中日間の交流がますます盛んになる一方で、急増してきた日本語学習者の実情に応じて、日本語教育を始めとする言語教育は「グローバル」と「ローカル」すなわち「グローバル」の視点から考えなければならなくなってきたように思われる。将来のグローバル社会に適応し、よりよい言語応用能力の人材を育成するために、教員は時代のニーズに即した人材養成に必要な新しい教育プログラムの開発に取り組むべきであろう^{2), 3), 4), 5), 6), 7), 8), 9)}。

このような背景のもとに、著者らは国際人材育成教育プログラムの一環として、青島理工大学と徳島大学の間で2009年10月からインターネット

を用いた遠隔ビデオ会議システム (SKYPETM) を用いて、双方向性のコミュニケーションを実施してきた。毎週一回、青島理工大学外国語学部日本専攻の学生と徳島大学の中国文化に興味を持っている学生及び社会人、それぞれ約5~10名により、事前に相談で決めた話題をめぐってコミュニケーション交流を行っている(図1、表1)。この一年間の交流を通じて、異文化コミュニケーションから得た知識、経験は数多く、普通の授業では経験できないような異文化を双方向のコミュニケーションを通じて理解し、身につけてきたように思われる。この取組に参加した学生の勉学意欲はきわめて高く、今回のコミュニケーション交流の取組はこのような学生の意欲を引き出す上で大きな効果を収めた。もちろん、異文化コミュニケーションには様々な課題があり、今回の交流においても様々な問題点が浮かび上がってきた。以下はこれまでの交流において、明確になってきた課題と今後の交流に対する課題をまとめたものであり、今後の交流に役に立てば幸いである。

2. 取組について

2.1. ビデオ会議の方法

毎回学生より出されてきた希望により、テーマを決定して、事前に双方の学生に周知した。ビデオ会議は、スカイプ™を使用して行った。WEBカメラは、ロジクール社 Webcam Pro 9000 QCAM-200SX、ビデオ会議用スピーカはサンワサプライ社製のものを使用した。

2.2. ビデオ会議の実施

ビデオ会議は、原則として毎週1回実施した。双方の学生は、5~10名程度であるが、社会人が加わることもあった。また、日本側では、大学の正規の授業時間（全学共通教育、学生と社会人による授業企画ゼミ、異文化交流から何を学ぶのか、グローバル社会を考える）に実施された。

3. 文化の相違性による理解差

「文化とは、ある集団のメンバーによって幾世代にも渡って獲得され蓄積された知識、経験、信念、価値観、態度、社会階層、宗教、役割、時間・空間関係、宇宙観、物質所有観といった諸相の集大成であるといえよう」¹⁰⁾。この定義によれば、文化とは世代を超えて私たちの脳の中に蓄積され固定化してきた観念であり、容易に変えることが出来ないという一面がある。したがって、言葉や習慣や常識などの文化背景が違う人とのコミュニケーションは、様々な面での困難が伴う。今回の取組は、インターネットを用いた遠隔ビデオ会議システムを用いて中日の両大学の教室を結ぶことで、国を超えリアルタイムのグループ間対話を実施した。このようにして、日本文化や中国文化を話題にしながら両校のパートナーが、もっと広い意味で「言語」、「文化」そのものについて、お互いに学びあうことが、如何に重要な意味を持っているのかということが、この交流を通じて次第に明らかになってきた。自分の国においては当たり前だと思っていることが、相手の国にとっては、奇妙なことであったり、或いは理解が困難な不思議な現象として捉えられることもあるというような事例もしばしば見受けられた。

3.1. 勘定文化の違いによる認識差

2009年11月に行われた一連の交流では、事前の相談を通じて決定した「日本と中国の食事文化」を主な議論のテーマとした。これら交流においては、日本の食事文化の中でも、特に弁当文化、お寿司、魚をテーマとして取り上げた。また、中国の食事文化については餃子を取り上げた。さらに結婚披露宴や各地の料理などについても取り上げて交流をおこなった。

その中の議論で、食事に友達を誘うとき、または誘われたときに、お勘定をどのようにするのかについても話し合ったが、それほど深くまで討論できず、相互に理解しにくいところも出てきた。この交流を通じて、気づいた問題点を以下のように整理した。

中国においては、「じゃあ、一緒に食事に行きましようか」という言葉で相手を誘うと、普通の場合では、誘うほうがおごり、誘われたほうはお金を払わなくて良いということになる。次回には、お返しとして誘われたほうに誘った方を招待し、お金を払えば良いという習慣である。

日本人は、このような場合、その支払い方は三通りの方法がある。一つ目の方法は、招くほうは全部払い、招かれたほうは払わない。このやり方は中国と似ている。しかし、一般的にはこの場合には事前に意思疎通を必要とするということである。そうでないと、招かれたほうが心理負担を負うし、義理人情欠如にも多大に影響されるだろう。二つ目は、招いたほうがとりあえず全額を支払っておき、招かれた方は後で招いた方に自分の分のお金を返すというやり方である。三つ目は、その場でそれぞれ自分の分を払ってしまう。後の二つはどちらも日本社会で一般的に通用する「割り勘」というやり方である。しかし、中国人の認識では、相手を誘い、お金を分担させることは相手にも不利で、自分の面子にも影響するという考えがある。このような「はじめをつける」交際方法において、中国と日本の文化の違いは明確であり、したがって今回の交流においても、双方の認識の差がはっきりとした形で見られた。



図1 青島理工大学（中国）と徳島大学（日本）との遠隔ビデオ会議風景
 A：ゼミ室での少人数のビデオ会議 B：スタジオを使ったビデオ会議

表1 青島理工大学（中国）と徳島大学（日本）との遠隔ビデオ会議による交流のテーマ

交流回数	年	月日	交流のテーマ
1	H21	9月28日	日本のアニメに見る自然観と人間観
2		10月5日	男の化粧について
3		10月19日	映画1リットルの涙について語ろう
4		10月26日	アニメNarutoについて
5		11月9日	ギョーザ
6		11月16日	日本の前衛女性芸術家 — 小野洋子
7		12月7日	中日の鬼と妖怪の文化
8		12月14日	中日の若者の恋愛観
9		12月28日	日本の住まいと衣服
10	H22	1月4日	お寿司
11		4月19日	和服
12		4月26日	大学生が卒業して進路の選択
13		5月10日	「走れメロス」と「人間失格」に見る太宰治の思想
14		5月17日	日本の会社はどんな人材がほしい
15		5月24日	新年
16		5月31日	嵐をはじめ、日本のアイドル
17		6月7日	中日の大学生の恋愛観
18		6月14日	日本文化について(飲食文化、お茶文化、お酒文化など)
19		6月21日	日本の食生活
20		6月28日	日本のファッション
21		7月5日	新年について
22		7月12日	お宅について
23		10月18日	お宅について その一(表現、原因など)
24		10月25日	お宅について その二(生活など)
25		11月8日	中華料理が日本料理に与える影響
26		11月22日	テーブルマナー
27		11月29日	どうやっていい友達ができるのか
28		12月6日	日本のアニメについて、中日の結婚式
29		12月22日	日本の大学生の学校生活、日本の環境を守るための今までの努力

3.2. 食卓習慣による認識差

客をもてなす時、中国人は必ず沢山の料理を作るが、習慣では8、10、12、16の皿数のおかずが基本である。偶数の料理を食卓の上に並べて客にバランス、落ち着き、上品さ、団欒の感じを与えている。中国の食卓の多くは丸く、食卓に着く人の数は4人、8人、10人の時が多い。こんなところにも4と偶数は中国人の伝統意識のなかにしっかり根付いているからである。このような中国の習慣に対して、日本人にとっては、どうしても贅沢とか、浪費という印象が強く残るようである。このような中国のもてなしの文化に比較すると、日本料理は量が少なく、新鮮さと品質を重視する文化であり、両者は異なる文化であるという一面を示す事実である。

食生活をテーマとした交流において、中国の学生から日本の学生に日本料理に対する質問が出たときには、刺身、天ぷら、うどんなどたくさんの料理を答えることができた。しかし、「知っている中国料理はなんですか?」と聞かれたら、「ええと、餃子かな」と暫く考えたうえ、一点、二点しか言えなかったのである。この原因としては、中国では南方は甘く、北は塩辛く、東は辛く、西は酸っぱいという分類と、北京料理、山東料理、四川料理など、それ以上もっと細かく分類されているために、中国料理に対する包括的な理解が難しいという面があろう。また、文化的な背景からも両国での料理に対する認識が違うから、このようなテーマにおける議論において、双方のギャップが出てくるのも当然である。今回の交流を契機にして、相互の文化をもっと深く理解して、認識していく努力をする必要があるだろう。

3.3. 同じ社会現象に対する異なる認識

2010年10月に行われた交流は「オタク」というテーマであった。この交流を通じて、現在、中日間では同じ社会現象が頻繁に出ていることが、双方の学生の間で認知されたと思われる。しかしながら、それぞれの国の社会事情が異なるために、「オタク」という概念に対する認知度やそれを許容するかどうかという認知度も違うので、学生の認識もそれぞれの国で異なっているようである。

中国では、「オタク」というと週末族と毎日族があり、共通点としてはゲームやインターネットなどといった屋内で遊べる娯楽に没頭し、一般的な人々と比べると外出頻度の少ない人をさす。現代では、若年層を中心として著しく増加しており、2007年の調査によると15~35才の2割以上が「オタク」とであると分類されている。もはや「オタク」は悪習慣より、個性的な暮らし方のひとつであり、ゲームファンというイメージが強い。中には研究族と呼ばれ、強い社会的責任を持ち無償で公益活動に参加するなど、日本の高等遊民と類似した人々も数多く存在している。彼らは分類化されたオタクの中でも特にインターネットへの依存度が高く、利用時間も格段に多い。

近年日本で話題となっている若者像としては、「ニート」と「オタク」の二種類の用語で表現されているものがある。ニートは働く意欲を欠いた若者であるが、必ずしもオタクとは限らない。一般的な解釈として、オタクはある趣味に夢中になり、家に閉じこもって、人とコミュニケーションが少ない人を指すことが多い。秋葉原系の趣味どころか世の中に対しての興味を喪失したような状態で、個室に引きこもったニートとは違う面がある。オタク族を“ずっとお宅にいる人”とするイメージが強い。勿論引きこもり人も、家庭内で仕事をしている人もいるだろう。内向的な性格を持っている人が、何らかの不愉快な経験があったなどの原因で、自分の世界にこもるようになった。この現象には、インターネットの普及も拍車をかけたように考えられている。「オタクというのは一日中家に閉じこもって、アニメを見たり、ネットゲームをしたりして、遊んでばかりの若者だと思ったが、今回の交流を通して、日本のオタクの本当の意味が分かり、大変勉強になった。」という学生の声が多かった。

中国においてオタクとは、ある分野に熱中している人々であり、必ずしもネガティブなイメージはない。ただ、オタクは独特の行動様式、文化を持つ人達であると理解されている。元来オタクはアニメ・SFのファンに限定した呼称であったが、現在はより広い領域のファンを包括し、その実態は一様ではない。中国でもかつてはオタクという言葉

葉に否定的な意味合いがあったが、現在は肯定的なイメージを含めて捉えられるようになった。その趣味の分野に関わらずオタクと呼ぶこともある。オタクはある分野に没頭しており、その分野をよく知っているために、彼らと同じ趣味を持っていれば交流も容易になる。今回の中日交流を通じてはじめて、日本のオタクと中国のオタクとが共通の用語で語られているが、実際の意味は両国の間でかなり異なっていることが判った。

60年代から80年代にかけて、日本がいわゆる高度成長期にあったときには、中国はまだ経済的には開放が十分に進んでおらず、経済発展途上の貧困な段階にあった。このように、かつては両国の経済状態が異なっていたために、同じ社会現象が両国間に同時に発生する可能性は極めて少ないと思われる。中国の改革開放路線が軌道に乗り始めた90年代以降、特に2000年以降には、中国と日本の間の差は次第に少なくなった。現在の中国では、日本の抱えている社会の諸問題、例えば人口構成の高齢化や都市部における交通量の増加による渋滞の日常化に象徴されるような自動車ブームが起こってきている。また、先進諸国に共通するパソコンの普及によるネットワーク社会の諸問題なども、中国においても頭が痛いほどの社会問題になってきている。オタクも、このような中国経済の発展に伴う諸問題のひとつであるに違いない。双方の国同士のコミュニケーションを円滑に進めて、同じ社会現象として再認識させることにより、双方の知恵を出し合いながら問題解決の糸口を見いだすことが大切であろう。

4. 相互交流の不均衡性

望ましい異文化コミュニケーションとは、自分と相手が、共存共栄と相互尊重のために行う情報交換であり、情報をお互いに共有すると共に、共通理解を形成する行為である。したがって、一方通行のコミュニケーションでは、上記の目的を達成することは困難であり、双方向性の会話は、異文化コミュニケーションの前提である。異文化コミュニケーションにおける真の双方向性の会話を実現するための環境要因として、相互に社会的地位の差、話題に関する知識の差、精神的な依存関

係などが無い状態が望ましい。つまり、双方向の会話は平等な人間関係を前提にしている。ところが、実際の異文化コミュニケーションでは、完全に平等な人間関係は、それほどあるものではない。そのために、異文化コミュニケーションを円滑に進めるためには、仮に平等ではない人間関係であったとしても、平等に発言の機会を与えるための気配りが出来るような思いやりの精神を持つことが重要になる。

4.1. 言葉の壁

相互交流のためには、必ず媒介としての言語が必要となる。これまでの交流においては、双方が日本語で交流を進めているが、言語の壁に影響されることなく順調に進んでいるとは必ずしもいえない。もちろん交流の目的として、相互理解を深めると共に、言葉のレベルを高めることも含まれているが、必要以上の言語の壁が立ちただかると、相互理解にも悪影響を及ぼすことも懸念される。中国側の学生は、決して流暢な日本語ではないが、平易で誰でも理解できる言葉を駆使することで、聞き手の心を捉えるように心がけている。話すときの気合や、相手の注意をひきつける話し方、そして良い印象を与える発音、視線、表情などを試行錯誤を繰り返しながら練習を行っている。さらに人に聞いてもらうことにより、相手の反応を見ながら、自分なりに納得のいくスタイルを作りあげていくようにしている。このような準備をして本番に臨めば、積極的に発言をするようになり、発言した内容が相手に伝達されるという成功率も高くなる。さらに、相手の発言に耳を傾けて、話の内容をスムーズに理解するようになる。このような過程を繰り返しながら、言葉の壁がなくなるレベルにまで会話能力を高めることが大切であるが、それと同時に非言語の手段も適宜導入すべきであろう。実際のコミュニケーションにおいては、言語の役割が重視されがちであるが、非言語の役割も言語と同程度、あるいはそれ以上に重要なものがあると言われている。例えば会話の手助けとなるような図、絵、写真などを用いることや、身振り、手振りなどを適宜利用して、スムーズな会話を実現させていくことにより、非言語コミュ

コミュニケーションに対する理解も深くなり、様々な場面における応用力も確実に進歩していくと思われる。このように外国語教育においては、非言語コミュニケーションの大切さも認識させることが必要であろう。

4.2. 情報の差

たとえ簡単な話題であったとしても、相互に有する情報が異なる点についての話題に入り込んでいくと、交流が容易に進むことが出来なくなる場合もある。例えば、日本の学生の話の中にも「最近、日本の若者の間に、漫才とか、お笑いとかが流行している」という話があった。しかし、中国側の学生には「漫才」、「お笑い」にはまったく触れたことがないものであり、その言葉が聞き取れるか、理解されるかの問題ではなく、そのような情報、知識がないのである。このような、情報や予備知識ないコミュニケーションはただ耳を傾けただけでは理解をすることは困難であろう。従って、普段の授業において、学生の予習は、出来る限りいろいろな手段を通じて、学生の興味を拡大させることにより、獲得できる情報源を拡大させるような工夫をして、出来る限り多くの情報を身につけさせるようにしなければならないと思われる。これまでの交流を見れば、もし双方に興味があり、把握できる情報量も充実した場合におけるコミュニケーションは、著しい効果を上げている。今後は、学生に日本語の言語知識を教えるとともに、学生の読書の指導を重視するべきであろう。このような経験を踏まえて、深い思考力と幅広い視野を併せ持った人材を育成していきたい。

5. 外国語教員としてすべきこと

5.1. 差異発見の指導

日本語を勉強する上で、言語だけではなく異文化に対する理解も重要な課題である。細かい異文化の違いや習慣に対する差異の意識がないと、将来日本人と一緒に仕事をするようになったとしても、つい中国人流の意識のもとに、やり方、習慣で物事を決定し、進めてしまうことになりかねない。また、普段の学校現場でなかなか気づかないところで、文化の摩擦が起きたり、誤解を生じた

りする。単なる日本文化の知識伝達、知識の紹介のみでは、社会のニーズに応じた日本語人材を育成することが難しいだろう。したがって、差異に気づくことを体験させる授業を実施することはきわめて重要だと思われる。今後は、教員も学生と共に、両国の文化的差異を発見しながら、この異文化交流の体験型授業を進めて行きたいと考えている。

5.2. 知識拡充の指導

中国側学生の日本語レベルの低さと知識の貧しさは避けられない問題である。普段の授業と日常生活の中で、日本に関連する知識、文化などを紹介する上に、学生自身自身に興味を持たせる指導は最も重要であろう。さらに学生の会話における表現方法を改善させる必要もある。中国語は本来ストレートな表現をする言語であるという特徴があり、自分の考えを直接的な表現で発言した学生は少なくない。コミュニケーションを円滑に行うために、相手国の文化的な特徴や、言語習慣などを予め理解しておくことは重要である。もしそれらを見逃して言語を使用すれば、たとえ文法的に正しくても、相手を不愉快にさせることが起こるに違いない。これから授業において、ビデオなどの視聴覚教材を用いて、言語だけでなく、日本人が会話時にどういう振る舞いをしているかを見せたり、テープなどの音声教材を用いて、イントネーションについても指導していきたいと考えている。

5.3. 客観的な異文化理解

教員も学生も、客観的な視点から積極的に異文化を理解しようとする試みは、コミュニケーションを円滑にするために必要である。異文化コミュニケーションのためのトレーニングでは、まず相手文化を理解して尊重することの重要性を強調している。なぜならば、自分の文化を物差しにして相手と接することが、お互いの建設的な関係構築を阻む最大要因であるためである。相手の文化を尊重するためには、自分の文化を絶対視するのではなく、多くの文化の中の一つであるとして、相対化した認識が出来るようにしなければならない。

さらに、相手文化を尊重することにより、初めて自分の文化も見えてくるという経験的学習が極めて重要な意味をもっている。このような相互理解と尊重があって、初めて意義のある異文化コミュニケーションが可能であり、その様なコミュニケーションから共通の理解が生まれ、そのような理解を土台として始めて共生共栄への方策を生み出し、協力して実行していくことが出来る^{9),10),11)}。

6. 日本人学生の課題

青島理工大学との異文化コミュニケーションは、徳島大学の学生にも大きな影響を与えた。これまで主な異文化コミュニケーションの手段は、同じキャンパス内の留学生や外国人教員との直接対話であった。今回の試みによりその対象が、海外の大学生にまで一気に広がった。個人と個人の対話から、グループ同士の対話へと変化したことにより、その話題は個人的なものから、必然的に社会の課題に関わるものに変化した。自分たちの社会問題を客観化した視点から、課題として見つめ直すことが必要となった。これまで、自身の視点からしか語ることが出来なかった学生に取っては、ハードルの高い取組である。外国人との日本語を使つての会話であるが、個人同士の会話とは異なったレベルの見識が必要になる。この点の理解が出来ていない段階では、些細な事項に対する質疑応答に終始してしまい、物事の本質に関わる議論にまで持ち込む事は難しい。このように、物事の見方に関する理解をさせることが、異文化コミュニケーションにおいて重要であり、今回の取組はその課題を明確化する働きをしたと言えよう。とりわけ、自らのアイデンティティ形成に関わる自国の文化に対する理解を促すための取組が急務の課題であろう。

7. 終わりに

コミュニケーションスキルは知識より技能であり、絶えず訓練することによって、上達できるのではないかと思う。一年間の交流を経て、学生たちの日本語会話レベルが目に見えて高くなった。それだけでなく、日本の伝統文化にも、現代文化にも興味深く勉強し始めた。学生の速戦力、柔軟

性、異文化に対する理解能力も著しく向上したと感じられた。すべて徳島大学とのネット交流のコミュニケーションのおかげである。また、日本側の学生にも、異文化交流に対する理解が飛躍的に向上し、留学生との交流プログラムに参加する学生数も増加した。さらに異文化理解に関する授業数も増加した。このプログラムに協力していただいた関係者の皆様に深く御礼を申し上げる。

参考文献

- 1) 国際交流基金会：海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査，凡人社，5，2008.
- 2) 古田暁監修・石井敏・岡部一郎・久米昭元著：文化とコミュニケーション，異文化コミュニケーション，有斐閣，1996.
- 3) 黒木敦子：言葉と文化，日本を知るための本，アルク，2001.
- 4) 吉岡正毅：養成講座の先生に聞く「日本事情とは？」，日本を知るための本，アルク，2001.
- 5) 砂川祐一：実践授業のヒント，日本を知るための本，アルク，2001.
- 6) 李徳奉：転換期を迎えた日本語教育に求められるもの，日本語教育，119号，1－10，2003.
- 7) 角田三枝：日本語クラスの異文化理解，くろしお出版，2001.
- 8) 山田泉：多様な日本語教育の展開と社会的課題克服への貢献，日本語教育，124号，3－12，2004.
- 9) 八代京子・町恵理子等：異文化トレーニング，三修社，2002.
- 10) 古田暁監修・石井敏・岡部一郎・久米昭元著：文化とコミュニケーション，異文化コミュニケーション，有斐閣，42，1996.
- 11) 八代京子・町恵理子等：異文化トレーニング，三修社，28，2002.